論文審査の要旨

博士の専攻分野の名称	博　士　（　学　術　）	氏名	張　琳
学位授与の要件	学位規則第４条第①・２項該当		

論　文　題　目

日中の「慰め場面」における言語行動の比較

―発話者相互の「慰め」方略―

論文審査担当者

主　　査	教　授	町　　博　　光
審査委員	教　授	酒　　井　　弘
審査委員	教　授	白　　川　　博　　之
審査委員	教　授	高　　永　　茂　（文学研究科）

〔論文審査の要旨〕

日本語教育において、近年、学習者のコミュニケーション能力、特に語用論的能力の育成が重要視されている。これまでの研究結果から、学習者の日本語は、母語話者の日本語（の運用規範）から逸脱し、誤解を招きやすいことが指摘されている。これは、異文化コミュニケーションの際に、話し手が無意識に母語の社会文化規範や言語文化規範に従ったことが原因であることが示唆されている。

異文化間で、「慰め」の言語行動を有効に行うためには、相手の属する社会文化の慰め方略を理解した上で、相手にとって受け入れられやすい慰め方略を選択することが重要である。ならびに、慰める相手の反応に応じて、適切な慰め方略を選択することも必要である。

本研究では、慰め場面に焦点を当て、慰める側と慰められる側の双方の言語行動を分析の対象としている。慰める側と慰められる側の双方の言語行動に焦点を当てることによって、これまで「慰める側」のみが一方的に分析の対象とされていた「慰め行動」を、相互行為として捉え直すことができると主張している。

この基本的な立場に立って、日本語母語話者（以下、「日本人」）と中国語母語話者（以下、中国人）の「慰め」場面における会話展開の特徴を明らかにしている。さらに、慰める側が用いた意味公式（慰め効果を狙って発する言葉の機能類型）が、慰められる側にどのように評価されるかも分析の対象としている。

第１章では、本研究の目的と方法を述べる。

第２章では、研究の枠組みと慰め行動に関する先行研究について述べる。言語行動の中での慰め行動の特徴を検討し、これまでの研究をまとめ、その成果と問題点を提起している。その上で、本研究の基本的枠組みであるポライトネス理論の概観を行っている。

第３章では、「慰める側の言語行動」を分析した。日本人と中国人双方の慰める側の言語行動の特徴を明らかにした。不幸な出来事を尋ねることによって、相手の状況を把握するという点は、日中で共通している。しかし、状況把握の方法は若干異なっている。日本人は「情報確認」を多く用いて相手の状況を確認しながらさらに話を促す傾向があるのに対し、中国人は「未知情報要求」を多く使用し、積極的に会話全体の状況を把握しようとする傾向がうかがえた。相手を慰める際に、日本人は、相手の気持ちや考えに寄り添う「共感」を多く使用し、いわゆ

る【同情同意型】の慰め方略を好んでいる。それに対し、中国人は、相手の悲観的な心理状態を改善する「励まし」や前向きなアドバイスを与える「助言」をよく用い、いわゆる【未来志向型】の慰め方略を好んでいることが明らかになった。

第４章では、「慰められる側の言語行動」を分析している。日本人は、不幸な出来事を相手に語る際、出来事を時系列に沿って詳細に情報を提供する行動がほとんどであった。一方、中国人は、会話冒頭に相手の関心を引きやすい表現を先に述べ、その後に出来事に関する情報を提示しながら、事の顛末や自分の心情・感想を繰り返し述べている。使用される意味公式も、日本人は「理解表明」「事情説明」が多く、中国人は「感想述べ」「心情表明」をよく用いている。

第５章では、慰める側と慰められる側の相互行為、及び慰める側の言語行動に対する慰められる側の評価について考察した。

a.　「慰め場面」における相互行為

意味公式を検討した結果、日本人と中国人の相互行為としての慰め行動には顕著な特徴が見て取れた。すなわち、日本人は、慰める側が「共感」を示し、それに対して慰められる側は「肯定」で返答し、慰める側はさらに「共感」を示し、互いに承認し合いながら会話を進めている。これに対し、中国人は慰める側が「励まし」「助言」を行い、それに対して慰められる側は「回避」「否定」で返答し、慰める側はさらに相手を説得し問題の解決策を提示したりして、相手の現状を改善しようと試みている。

b.　慰める側の言語行動に対する慰められ側の評価

慰める側は、日本人は「共感」を多用していた。ところが、慰められる側の「共感」に対する評価はそれほど高くない。一方、中国人も「励まし」「助言」とともに「共感」も使用している。中国人においても「共感」の評価意識は低い。「共感」「励まし」は意識調査では評価が低いものの、具体的な慰め場面では多用されている。これは、「共感」「励まし」が相手の気持ちに寄り添い、相手を回復させようとする基本的なストラテジーであるがゆえに、日本人も中国人も、「共感」「励まし」を多用しているのだとの解釈を示している。

第６章では、第３章から第５章の考察をまとめ、日本語教育への示唆と今後の課題について述べる。

本研究の特色を以下の３点にまとめることができる。

① 従来、慰める側のみが分析の対象であった慰め行動を、慰める側と慰められる側の相互行為として捉え、それぞれの立場から詳細に分析した。

② ロールプレイ調査により生きた資料を収集し、日中の慰め行動の会話資料を作成し、「意味公式」を用いて詳細な構造化を行った。

③ 「慰める側」と「慰められる側」の意識調査を行い、「慰められる側」と「慰める側」の言語意識と実際の言語表現の差を明らかにした。

以上、審査の結果、本論文の著者は博士（学術）の学位を授与される十分な資格があるものと認められる。

平成２６年２月１０日